

酢橘

宮坂静生



霜来るか木がはうはうと呼びるたり
魯穂も天折のうち田は棺
恵那山は臼を据ゑたり秋微塵
豊年やつぎつぎ電車トンネルへ
腐り易き男にしぼる酢橘かな
赤松の鱗の殺気立つ冬へ
一と夜さに落葉松林火の回り



十月尽ぬた場の雨の刺すばかり
秋の蛇地球流体感に充ち
姥百合の実に落魄のはじまれり
高^{たか}揆^{はこ}の消えゆき小鳥さみしさう
冬麗の夕映が山刻みをり
地滑りの裂れじんわりと冬菜畑
割りかんのごとと雪搔きの両隣
灯の海の上に宙なし銀座冬